

黒の情熱

淫らな戯れ



かのえ なぎさ

illustration

史堂 權

黒の情熱く淫らな戯れく

《立読み版》

かのえなぎさ

イラスト 史堂 權

冬は嫌いだ——。

シリル・アイヒベルクは、冷たくなった唇をぐつと引き結びながら、心の中で呟く^{やぶく}。とにかく、腹が立つほど寒いのだ。

あまり感情を表に出さないシリルだが、寒さに関してだけは別で、理不尽ともいえる怒りを周囲にぶつけたくなる。しかし寒さが、そんな気力すら奪っていく。

アグシエラ王国の冬は、周辺国に比べれば比較的過ごしやすいといわれている。降雪量が少ないというのがその理由として挙げられるが、雪が降らない分、空気は凍りつきそうなほど冷たく乾いている。

シリルにはそれが何よりも堪^たえるのだ。

「……早く冬が終わればいいのに……」

堪^{たま}らずぼそりと呟くと、先を歩く男の背がピクリと動いた。

「冬はまだ始まったばかりだぞ、アイヒベルク大尉」

「言われなくても分かっています、ライツ上級大尉」

必要以上に素っ気なくシリルは応じる。それが面白かったのか、ライツ上級大尉——ガイド・ライ

ツが肩越しに振り返り、口元をわずかに緩めた。

「文句を言ったところで、冬の寒さは変わらないだろ。まあ、シリルの文句を聞いて初めて、俺は冬の訪れを実感するんだがな」

「それだけ立派な筋肉の鎧よろいを着込んでいたら、寒さも寄りつかないでしょうね」
恨みがましい口調で言ったシリルは、グイードの体を無遠慮に眺める。

防寒対策のため、軍の支給品である分厚いコートをしっかりと着込んでいるシリルとは違い、グイードはアグシエラ王国軍の軍服を堂々と見せつけている。

コートを腕にかけて歩く様は、冷たい風すら避けて通りそうな迫力がある。寒さに身を縮こまらせているシリルとは大違いだ。

シリルの憎まれ口に、グイードはさらりと応じた。

「着膨れしたお前に肉体を褒められると、気分がいい」

「もっと褒めてやるから、この場で軍服を脱いで見せろ」

「……往来でそんなことしてみろ。憲兵がすっ飛んでくるぞ」

軍司令本部の入るビルを出て、大尉と上級大尉という階級の差から一時的に解放されると、二人の雰囲気と口調は自然に砕けたものへと変わる。

シリルとグイードは士官学校時代に知り合った。一年違いの先輩・後輩という間柄から、遠慮なく語り合える親友同士となり、シリルがグイードを追う形で近衛師団の第一大隊に配属されてからも、その関係は変わらない。

軍人らしい表現をするなら、まさに背中を任せられる相手だった。

もつとも——シリルたちに戦場での経験はない。アグシエラ王国はこの数十年、交戦とは無縁の平和な国なのだ。

グイードが腕時計に視線を落としてから、前方を指した。

「まだ時間があるから、コーヒーでも飲まないか？」

シリルが頷くと、グイードの歩調が速まる。これが、グイード本来の歩く速さなのだ。一応、シリルの歩調に合わせる配慮は見せてくれるが、何かの拍子にせっかちな性格が顔を覗かせる。

ちらりと苦笑を漏らしたシリルはやや苦勞しながら、グイードの背後をぴたりとついて歩く。自分でもよく分からないが、グイードの背を眺めて歩くと落ち着くのだ。

ガイドは、この国では珍しい黒髪を持ち主だ。長身で機能的に鍛えられた体つきと、一かけらの甘さもないが、非の打ち所のない整った顔立ちもあいまって、圧倒的な存在感を放っている。近寄りがたい一方で、人目を惹く。

他国から移住してきた祖父母の血を色濃く受け継いだゆえに、このように目立つ風貌をしているようだ。軍に入ったのも、ガイドなりに自分の外見から思うところがあつたようだ。

一方のシリルは――。

軍司令部から近いため、軍の関係者がよく利用しているカフェに到着する。

店の大きなガラス窓に、異国人のようなガイドと並ぶシリル自身の姿が映っていた。

ありふれた、という表現しかない、限りなく金色に近い薄茶色の髪的青年が、シリルだ。二十六歳という年齢のわりに落ち着いて見えるとよく言われる。

容貌そのものは、母親譲りの優しげな目鼻立ちをしているのだが、愛想のない性質のため、長所が生かされているとはいいたい。

ちなみに瞳の色は、シリルは琥珀色で、ガイドは髪と同じ黒のように見えて、実はわずかに茶色がかった。明るい場所ですらよく分かるのだが、この曇天の空の下では、ガイドの瞳の魅力はなか

なか伝わらないだろう。

「——シリル」

ガイドと呼ばれて我に返ったシリルは、手招きされて店に足を踏み入れた。

さほど混み合っていない店内にいる客の大半は、軍服姿の軍人だ。一応、軍司令部の入るビル内にも、コーヒーを飲める店ぐらいあるのだが、やはり気詰まりするののか、時間に余裕がある場合、この店に立ち寄る人間は多い。

シリルがゆっくりと店内を見回す間に、ガイドは空いたテーブルを素早く見つけ、大股で歩み寄る。再び名を呼ばれてシリルが見たときには、コートをイスに掛けて席を取っていた。

こういうささやかなところで、シリルがガイドの行動力を実感しているとは、本人は思いもしないだろう。

さらにガイドは、シリルがコートのボタンを外す間も傍らに立ち、まるでボーイのように脱がせてくれた。

「……私が普段から、年上のお前を顎で使っているように思われそうだ」

イスに腰掛けたシリルがぼそりと漏らすと、二人分のコーヒーを注文したグイードは、恭しく胸に手をやって頭を下げた。

※続きは製品版でお楽しみ下さい。

黒の情熱く淫らな戯れく

《立読み版》

発行日 2011年8月4日

著者名 かのえなぎさ

イラスト 史堂 權

発行所 【MILK-CROWN】

株式会社水晶院

<http://www.milk-crown.net/>

(C) Kanoe Nagisa 2011

※本著作物の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。